

2017年度特別研究期間 研究成果概要

所属・職・氏名：商学部 教授 田中 裕幸

研究課題：非定形補文における与格認可と受動態

研究期間：2017年4月1日 ～ 2018年3月31日

研究成果概要

ミニマリスト統語論の枠組みで広く採用されている動詞句構造においては、外項を投射する機能範疇 v が対格を与える機能をも担うと仮定されているが、本研究では格付与子 v が主語(外項)の基底生成位置を c 統御するという仮説(The Object Case Assigner C-Commands the Subject; OCACCS)を中心に据え、その経験的妥当性と理論的含意を検証した。より具体的には、OCACCS は次のように述べられる。

(i) 動詞の項は全て v の補部内に基底生成される。

(ii) v は EPP 素性を持つ。

他動詞の v は一般的に格素性に加えて(ii)のように EPP 素性を持つと仮定した上で、能動他動文においては EPP 素性により主語が v の c 統御領域から引き上げられた後に目的語に格が付与される。

また、一つの格付与子が複数の被格付与子に格を与える状況が生じた時に、構造的に上位にある被格付与子が与格として現れることを保証するメカニズムも提案した。この仮説と上記 OCACCS との組合せにより、二重目的語構文において与格が認可されるのと同じメカニズムで、非定形補文の与格主語が認可されるという分析が可能になり、与格の出所が何なのかという問題を解決することができる。また、受動態の派生を自然に導き出すことが可能になる。

このような見通しの下、文献調査と併行して、受動態、与格、および関連する諸概念についての理論的な提案を精査し、分析を行った。また、年間を通じて国内外の学会に積極的に参加し、多くの刺激を受けた。本研究は OCACCS を中心に据えているが、主に非定形補文内の与格認可に関するものと受動態に焦点を当てたものに二分でき、それぞれ年度内に一定の成果を見たので、順に概要を述べる。

非定形補文における与格認可に関しては、2016年度までは音形を持つ与格名詞句が非定形補文に現れるケースを見てきたが、その理論的拡張として、英語の空代名詞 PRO も非定形補文に現れる与格名詞句として分析する可能性を、「与格名詞句としての PRO」と題した論文にまとめた(『言語と文化』第13号、関西学院大学言語教育研究センター、2018年3月)。この分析が正しければ、PRO が、英語においては形態的には現れないが通言語的に認められる与格を持つと考えることにより、1980年代から仮定されていた PRO の格理論上の特殊性を取り除くことが可能になる。経験的には、PRO が動的法助動詞の補部内に生起することが、従来の分析(特にゼロ格に頼る分析)からは予測できないという点に注目した。この事実は、PRO が与格を持つという仮説に加えて、OCACCS および与格が不完全な被格付与子の形態的具現であるとする仮説を採用することにより、正しく予測できるということを示した。

次に、受動態に焦点を当てた研究としては、OCACCS と与格認可の仮説をベースに、統語派生

における素性処理操作の順序に着目した分析を試み、2018年1月4日～7日に米国ソルトレイクシティで開催されたアメリカ言語学会(Linguistic Society of America)年次大会にて発表した。

直接受動態については、Baker, Johnson and Roberts (1989)が提唱した、受動形態素が項であるとする分析の利点を継承しつつ、理論的な問題を解決することができると主張した。また、日本語に見られる間接受動態に関しては、与格名詞句が格付与子の要求を満たせない不完全な被格付与子であるという前提のもと、与格の出現を含む格配列、および与格名詞句の主語性や埋め込まれる動詞が非対格であってはならないという一般化など、この構文の基本的性質を無理なく説明することができることを示した。

目的語に対する格付与子 v が外項の基底生成位置を c 統御するとする OCACCS 仮説により、 v が潜在的に外項に格付与することができる。これにより、何らかの操作により外項を格付与子の領域内へ取り込む必要がなくなり、受動態の分析が容易になることを示した。上述の通り、他動詞の v の EPP 素性による主語の iP 指定部への牽引の後に目的語への格付与が行われた場合に能動他動文が派生される。一般的に同一の主要部を持つ複数の素性の処理の順序に制約はないと仮定すれば、この逆の順で派生が進ことも許され、他の条件が整えば収束に至るはずである。この順序 (v が格付与を行ってから EPP による牽引を行う) の派生が収束したものが所謂(直接・間接)受動文であると主張した。つまり、能動態と受動態の統語的な差は、 v という一つの機能範疇を持つ二つの素性を処理する操作の適用順序の違いに帰因するということが、この分析から得られる重要な理論的含意である。